立 命 館

言 語 文 化 研 究

18巻1号

目　次

特集
春季企画
Dazaï O.
—太宰治とその生涯をめぐって—

はじめに ……中川成美（ 3 ）

Dazaï O.……Gilles SIONNET／Marie-Francine LE JALU／中野　茂（訳）（ 5 ）

太宰治における弱者のユートピアについて ……西川長夫（21）

質疑応答 ……（25）

個別論文

契丹大字墓誌における漢語借用語の音系の基礎
—金啓孮先生逝去二周年に寄せて—……愛新覚羅　烏拉熙春（ 35 ）

ナチ・ユダヤ人強制収容所と「創世記」の世界
—『転落の後に』における罪と悪の問題— ……及川正博（ 47 ）

中日社会、文化多面比较：风土、国情篇
—地缘人文层次的考察（1）— ……夏　剛（ 71 ）

ツエラーンの詩『ひとつに』をめぐって ……金子英雄（131）

「玉ねぎ魚」現象とドイツ語の新正書法について ……Gudrun GRAEWE（145）

教育実践ノート

Moodleを利用したコンテンツベースの授業実践と情報コミュニケーション ‥野澤和典（157）

学生の発言力を高める方法 ……川村欣司／工藤多恵／Eric M. HAIL（169）

執筆者紹介

中　川　成　美	立命館大学文学部教授
Gilles SIONNET	フランス国立高等映像学院講師
Marie-Francine LE JALU	映像作家
中　野　　茂	青山学院大学・早稲田大学非常勤講師
西　川　長　夫	立命館大学大学院先端総合学術研究科特任教授
愛新覚羅　烏拉熙春	立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授
及　川　正　博	立命館大学国際関係学部教授
夏　　剛	立命館大学国際関係学部教授
金　子　英　雄	立命館大学理工学部教授
Gudrun GRAEWE	立命館大学経済学部助教授
野　澤　和　典	立命館大学情報理工学部教授
川　村　欣　司	立命館大学理工学部教授
工　藤　多　恵	立命館大学言語教育センター講師
Eric M. HAIL	立命館大学言語教育センター講師

『立命館言語文化研究』編集委員会

委員長　中　川　成　美

委　員　池　内　靖　子
堀　田　秀　吾
河　原　典　史

立命館言語文化研究　18巻1号(通巻85号)

2006年8月1日　印刷
2006年8月10日　発行

発行者　中　川　成　美

発行所　立命館大学国際言語文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL (075) 465-8164
E-mail : genbun@st.ritsumei.ac.jp

印刷所　㈱田中プリント

個別論文

契丹大字墓誌における漢語借用語の音系の基礎

——金啓孮先生逝去二周年に寄せて——

愛新覚羅 烏拉熙春

Abstract

In the Khitai's epitaphs written in large scripts, there are many words transliterated from the Chinese, which fall into two categories: the first are a group of words which are specially used to transliterate Chinese words, the second are those words which can both be used in transliteration and the Khitans. The values of the two types of words are somewhat different: the former is based on the pronunciation of the Chinese characters, but that does not mean they are identical to the Chinese, for "proximate substitution" is a frequent phenomenon in transliteration; while the latter is based on the pronunciation of the Khitans words, which, when function in transliteration, take the form of "temporary orthography". By making clear the value sources of two types of words, it would be possible to restore the original form of the Chinese language used in the communication with the Khitans. According to the author's interpretation of the Khitai's large script, this paper points out that the Chinese in the Liao dynasty are: (1) the appearance of the second-class medial "i" ; (2)the separation between the two final of "i／i"; (3) the ending of abrupt tone was condensed to "-p".

Keywords:epitaph in Khitai large scripts,northern Chinese in the Liao era,final,entering tone ending,initial

契丹大字墓誌は契丹小字墓誌と同様に、大量の漢語訳音語を包含する。これら漢語訳音語を記録する方式は二種に分かれ、一は一群の漢語の単語を音訳するのに専門に用いられる字を使用するものであり、二は一群の契丹語の単語を綴るのに兼用される字を使用するものである。この二種の字が表示する音価は異なるところがあるはずである。漢語の単語を音訳するのに専用される字は、音価の設定が明らかに漢語の発音に依拠しているが、これらの字の音価は必ずしも漢語と完全には同じでなく、「近似の代替」という外族の単語を音訳する際に常見する現象が存在する可能性を排除できない。契丹語の単語を綴るのに兼用される字は、その音価の設定が契丹語に存在する発音に依拠しているはずで、これらの字はさらに転じて漢語の単語を音訳するのに用いられるが、そこには必ずや「権宜表音」の情況があるはずである。この二種類の表音字の音価の來源を明白にするために、さらに契丹大字墓誌に出現する漢語訳音語を分析してみると、遼代契丹人が接触した漢語の原貌を比較的正確に近く復元することができる。

このほか、契丹大字の字源を分析する、つまりこれら漢字の発音を借用した契丹大字の音価を分析することも、それらの漢字の音価を逆推するための一つの補助的方法となる。

1 遼代北方漢語の韻母

1.1. 二等字i介音の発生

漢語研究の著作では一般に元代以前の二等字の韻母にi介音が存在せず、元代に至って、二等字の見組声母字にはじめて普遍的にi介音が発生するとされる。つまり、一等字と二等字の相違は、

主要な母音の差異からi介音の有無の差異に転化し、この推移は元代に完成するということである。

しかし契丹文字の解読は、二等字における次生i介音が、つとに遼代北方漢語にすでに発生していたことを証明する。例を挙げると以下の如くである。

契丹大字	契丹小字	『広韻』推定音
光兄*ŋia／衙		(疑麻開二平假)*ŋa
牙当*giaŋ／江	八气*giaŋ	(見江開二平江)*kɔŋ
庆*giau／校	八爻, 八爻*giau 夂	(見效開二去效)*kau
夲*giæm～giam／監	八交, 八仝*giæm 八才, 八才*giam 仝 乃 仝	(見銜開二平咸)*kam
／檢	八仝, 八交*giæm 仝	(見琰開三上咸)*kɪɛm
／兼	八才*giam 仝	(見添開四平咸)*kiem
牙*gia／家	八才*gia	(見麻開二平假)*ka
[字源]牙		(疑麻開二平假)*ŋa
	不才*xia／夏、下	(匣馬開二上假)*ɣa
	八亚*giaŋ／耿	(見耿開二上耿)*kæŋ
	业亚*piaŋ／彭 㚔	(並庚開二平梗)*bɐŋ
	又亚*ʃiaŋ／省	(山梗開二上梗)*ʃɐŋ
	又孕*miaŋ／孟	(明映開二去梗)*mɐŋ
	不业*xiaŋ／行	(匣庚開二去梗)*ɣɐŋ

契丹大字「兄」の音価は契丹小字「才」に等しく、ともにjaであり、従って家麻韻の「衙」がすでに介音をもつŋiaであったことがわかる。契丹大字「牙」の字源は漢字「牙」で、その表示する音節は契丹小字の「八才」*giaに等しく、家麻韻の「家」、「牙」と江陽韻の「江」にみなすでにi介音が出現していたことがわかる。「監」、「檢」、「兼」は本来二、三、四等に分属し、主要な母音は異なる。しかし契丹大字は均しく同一の「夲」を用いて表音する。契丹小字は四種の綴り方形式を使用するが、この三字の発音を明確には区分しておらず、「八交」*giæmと「八仝」*giæmの音
仝
価は一致し、「八才」*giamと「八才」*giamの音価も同じである。ここから二等の「監」がgiæmに
乃 仝
作り、またgiamにも作ったこと、三、四等の「檢」と「兼」が同様にgiæmにも作り、またgiamにも作ったことがわかる。契丹小字墓誌に出現する「八亚」*giaŋは姓氏「耿」の音訳だが、『遼史』では「姜」に作る。「耿」字は耿韻二等字に属し、「姜」字は陽韻三等字に属し、当時それらの発音が近く、「耿」字にすでにi介音が発生していたことがわかる。漢語の韻母系統に存在するia(原二等字)、iɛ(原三、四等字)兩類の韻母の対立は、明代以後はじめて消失するが、元代にはなお以下の対立が保存されていた。

ia 加／iɛ 遮　　iam 監／iɛm 兼　　iau 交／iɛu 堯　　ian 奸／iɛn 堅

契丹小字は「才」*ia、「交」iæを使用して漢語に当時存在していた「ia／iɛ」を厳格に区分して対

訳することはなかったが、これは遼代漢語のこの二種の韻母の間に区別がなかったことを示すものではなく、これが契丹人がこの二種の韻母の微細な差別を明確に聞き分けることができなかったために生じたことを説明できるだけである。二等字i介音の発生は、k組声母字が口蓋化して舌面音ʨになるという発展に準備条件を提供した。契丹文字の解読結果の証明するところでは、この条件は実質的につとに遼代北方漢語にすでに出現しており、それは遼代北方漢語韻母系統の一大特色となっている。

二等韻でi介音が発生していないものには、現在「諧」と「解」の二字が発見されるのみである。遼宋の漢文史料においては、「諧」、「解」と「海」、「孩」の交互対音の事例が出現する。たとえば、契丹の人名「諧里」は、「解里」にも作る。「諧」、「解」はともに二等韻に属する。しかしこの名はなお「海里」あるいは「孩里」に作るが、「海」と「孩」は一等韻に属する。この契丹名を契丹大字は「𢘑」に作り、契丹小字は「𠂤用」に作る。明らかに、「諧」と「解」は当時なおi介音を出すまで発展していない。

1.2. ɪ／i韻母の分立

ɪ／i韻母の分立は、一般には宋、元の際に発生した音韻現象とされている。ɪ韻母は『広韻』支・脂・之の三四等に淵源し、宋代にはこの三韻はすでに合流していた。ɪ韻母が代表する二個の音位変体は、ʦ組声母と結合したɿ・tʂ組声母と結合したʅである。『切韻指掌圖』(宋·司馬光[1019～1086])はすでに本来四等に属していた支・脂・之の韻字を一等に列し、当時これらの字の韻母がすでに推移して舌尖音ɿになっていたことがわかる。ある学者は、元代に至って、ɪ／i韻母の分立は異なった声母字(たとえばʦ、ʦ声母とp、t、k声母)に存在するだけでなく、同じ声母の字(すなわちʦ、ʦʼ、s声母とtʂ、tʂʼ、ʂ、ʐ声母)にも存在するとする。たとえば『中原音韻』には以下の字例がある。

ʦɿ、ʦʼɿ、sɿ　　支思韻(1)：髭、子、字、雌、慈、此、斯、詞、死、似
ʦi、ʦʼi、si　　齊微韻(1)：蘸、濟、霽、妻、齊、砌、西、洗、細
tʂʅ、tʂʼʅ、ʂʅ、ʐʅ　　支思韻(2)：支、紙、志、眵、齒、翅、施、時、史、是、兒、爾、二
tʂi、tʂʼi、ʂi、ʐi　　齊微韻(2)：知、直、質、制、笞、池、恥、実、失、世、日

契丹文字が漢語を音訳する綴り方と対比すると、以下の如き音韻の対応関係が得られる。

		契丹小字	契丹大字
支思韻(1)	子	廿*ʦɪ, 仐谷*sɪ, 伞谷*ʦɪ	子*ʦɪ
	紫	伞谷*ʦɪ	子*ʦɪ, 冈*ʦɪ
	刺	廿*tsɪ, 仐谷*sɪ, 万谷*sɪ	冈*tsɪ
	慈		冈*tsɪ
	司	廿*sɪ	冈*sɪ
	四		冈*sɪ
齊微韻(1)	祭	伞关*ʦi	
	濟	伞关*ʦi	
	齊	万关*si, 仐关*si, 仐关*si 关	犀*si
	漆	万关*si, 仐关*si, 伞关*ʦi	犀*si
	七	万关*si	
	西	仐关*si	犀*si

主要な母音の差異からi介音の有無の差異に転化し、この推移は元代に完成するということである。

しかし契丹文字の解読は、二等字における次生i介音が、つとに遼代北方漢語にすでに発生していたことを証明する。例を挙げると以下の如くである。

契丹大字	契丹小字	『広韻』推定音
兆兄*ŋia／衙		(疑麻開二平假)*ŋa
牙㓞*giaŋ／江	𠀋気*giaŋ	(見江開二平江)*kɔŋ
庆*giau／校	𠀋㓞, 𠀋㓞*giau 及	(見效開二去效)*kau
㓞*giæm～giam／監	𠀋交, 𠀋仝*giæm 𠀋犭, 𠀋犭*giam 仝 乃 仝	(見銜開二平咸)*kam
／檢	𠀋仝, 𠀋交*giæm 仝	(見琰開三上咸)*kɪɛm
／兼	𠀋犭*giam 仝	(見添開四平咸)*kiem
牙*gia／家	𠀋犭*gia	(見麻開二平假)*ka
[字源]牙		(疑麻開二平假)*ŋa
	不犭*xia／夏、下	(匣馬開二上假)*ɣa
	𠀋亚*giaŋ／耿	(見耿開二上耿)*kæŋ
	业亚*piaŋ／彭 㚔	(並庚開二平梗)*bɐŋ
	又亚*ʃiaŋ／省	(山梗開二上梗)*ʃɐŋ
	又仔*miaŋ／孟	(明映開二去梗)*mɐŋ
	不丛*xiaŋ／行	(匣庚開二去梗)*ɣɐŋ

契丹大字「兄」の音価は契丹小字「犭」に等しく、ともにjaであり、従って家麻韻の「衙」がすでに介音をもつŋiaであったことがわかる。契丹大字「牙」の字源は漢字「牙」で、その表示する音節は契丹小字の「𠀋犭」*giaに等しく、家麻韻の「家」、「牙」と江陽韻の「江」にみなすでにi介音が出現していたことがわかる。「監」、「檢」、「兼」は本来二、三、四等に分属し、主要な母音は異なる。しかし契丹大字は均しく同一の「㓞」を用いて表音する。契丹小字は四種の綴り方形式を使用するが、この三字の発音を明確には区分しておらず、「𠀋交」*giæmと「𠀋仝」*giæmの音
仝
価は一致し、「𠀋犭」*giamと「𠀋犭」*giamの音価も同じである。ここから二等の「監」がgiæmに
乃 仝
作り、またgiamにも作ったこと、三、四等の「檢」と「兼」が同様にgiæmにも作り、またgiamにも作ったことがわかる。契丹小字墓誌に出現する「𠀋亚」*giaŋは姓氏「耿」の音訳だが、『遼史』では「姜」に作る。「耿」字は耿韻二等字に属し、「姜」字は陽韻三等字に属し、当時それらの発音が近く、「耿」字にすでにi介音が発生していたことがわかる。漢語の韻母系統に存在するia(原二等字)、iɛ(原三、四等字)両類の韻母の対立は、明代以後はじめて消失するが、元代にはなお以下の対立が保存されていた。

ia 加／iɛ 遮　　iam 監／iɛm 兼　　iau 交／iɛu 堯　　ian 奸／iɛn 堅

契丹小字は「犭」*ia、「交」iæを使用して漢語に当時存在していた「ia／iɛ」を厳格に区分して対

訳することはなかったが、これは遼代漢語のこの二種の韻母の間に区別がなかったことを示すものではなく、これが契丹人がこの二種の韻母の微細な差別を明確に聞き分けることができなかったために生じたことを説明できるだけである。二等字i介音の発生は、k組声母字が口蓋化して舌面音ʨになるという発展に準備条件を提供した。契丹文字の解読結果の証明するところでは、この条件は実質的につとに遼代北方漢語にすでに出現しており、それは遼代北方漢語韻母系統の一大特色となっている。

二等韻でi介音が発生していないものには、現在「諧」と「解」の二字が発見されるのみである。遼宋の漢文史料においては、「諧」、「解」と「海」、「孩」の交互対音の事例が出現する。たとえば、契丹の人名「諧里」は、「解里」にも作る。「諧」、「解」はともに二等韻に属する。しかしこの名はなお「海里」あるいは「孩里」に作るが、「海」と「孩」は一等韻に属する。この契丹名を契丹大字は「𢘑」に作り、契丹小字は「仝用」に作る。明らかに、「諧」と「解」は当時なおi介音を出すまで発展していない。

1.2. ɪ／i韻母の分立

ɪ／i韻母の分立は、一般には宋、元の際に発生した音韻現象とされている。ɪ韻母は『広韻』支・脂・之の三四等に淵源し、宋代にはこの三韻はすでに合流していた。ɪ韻母が代表する二個の音位変体は、ʦ組声母と結合したɿ・tʂ組声母と結合したʅである。『切韻指掌圖』(宋·司馬光[1019～1086])はすでに本来四等に属していた支・脂・之の韻字を一等に列し、当時これらの字の韻母がすでに推移して舌尖音ɿになっていたことがわかる。ある学者は、元代に至って、ɪ／i韻母の分立は異なった声母字(たとえばʦ、ʦ声母とp、t、k声母)に存在するだけでなく、同じ声母の字(すなわちʦ、ʦ'、s声母とtʂ、tʂ'、ʂ、ʐ声母)にも存在するとする。たとえば『中原音韻』には以下の字例がある。

ʦɿ、ʦ'ɿ、sɿ　　支思韻(1)：髭、子、字、雌、慈、此、斯、詞、死、似
ʦi、ʦ'i、si　　齊微韻(1)：躋、濟、霽、妻、齊、砌、西、洗、細
tʂʅ、tʂ'ʅ、ʂʅ、ʐʅ　　支思韻(2)：支、紙、志、眵、齒、翅、施、時、史、是、兒、爾、二
tʂi、tʂ'i、ʂi、ʐi　　齊微韻(2)：知、直、質、制、笞、池、恥、実、失、世、日

契丹文字が漢語を音訳する綴り方と対比すると、以下の如き音韻の対応関係が得られる。

		契丹小字	契丹大字
支思韻(1)	子	廿*ʤɪ, 仐谷*sɪ, 伞谷*ʤɪ	子*ʤɪ
	紫	伞谷*ʤɪ	子*ʤɪ, 冈*ʤɪ
	刺	廿*ʦɪ, 仐谷*sɪ, 肓谷*sɪ	冈*ʦɪ
	慈		冈*ʦɪ
	司	廿*sɪ	冈*sɪ
	四		冈*sɪ
齊微韻(1)	祭	伞犬*ʤi	
	濟	伞犬*ʤi	
	齊	肓犬*si, 仐犬*si, 仐犬*si 犬	犀*si
	漆	肓犬*si, 仐犬*si, 伞犬*ʤi	犀*si
	七	肓犬*si	
	西	仐犬*si	犀*si

支思韻(2)	持	朴乂*ʃi	尒*ʃi
	旨	友*ʧi	之*ʧi, 芝*ʧi
	史	兀*ʂi, 又乂*ʃi	杲*ʂi
	事	兀*ʂi, 兀谷*ʂɿ	杲*ʂi
	使	兀*ʂi, 兀谷*ʂɿ, 又乂*ʃi	杲*ʂi
	侍	兀*ʂi, 兀谷*ʂɿ	杲*ʂi
	師	兀*ʂi, 又乂*ʃi	杲*ʂi
	士	兀*ʂi	
	兒	兀*ʐi	
齊微韻(2)	知	友*ʧi	芝*ʧi
	制	面乂*ʧi	
	石	兀*ʂi	夭*ʃi
	実		夭*ʃi
	詩	兀*ʂi	杲*ʂi

上表に列した対音関係よりわかるが、

1. 契丹大字の「冈」は契丹小字の「圡」に相当し、代表する音価はʤɿ、ʦɿ、sɿの三類の音節を包括する。

2. 契丹大字の「子」は契丹小字の「伞谷」に相当し、代表する音価は*ʤɿ音節である。契丹小字で漢語韻母の音訳に専用される「谷(異体:夲)」が代表する音価はʤɿ、ʦɿ音節中の舌尖母音ɿである。「伞」は漢語精母字を音訳する場合のみに出現し、従ってその音価はʦであるはずである(漢語清母字「漆」を音訳するものは個別的な事例に過ぎず、この種の場合はその基本的な音価を決して代表しないと考えられる)。

3. 契丹小字「仐」と「万」はともに契丹語の単語を綴るのに兼用される。「仐」が代表するのは契丹語のもつ子音sで、それは契丹語にない漢語の声母ʦ、ʦʼを音訳するときに用いられ、一種の「権宜表音」である。「万」を含有する契丹語の単語は今に至るもなお未解読だが、「万」が漢語を音訳する用例「刺」、「齊」、「漆」を根拠に推測すれば、その音価はsとʃを出ず、暫らくsに推定しておく。

4. 契丹大字「犀」は漢語を音訳するのに専用され、その代表する音価は契丹小字の「万乂」*siと「仐乂」*siに相当する。しかし「犀」は心母字「犀」に淵源し、従ってその基本的な音価は*siであるはずである。「犀」が清母字の音訳に用いられるのは、正に「仐乂」と同様に、さほど適切な訳音ではない。

一つの明白な事実として、齊微韻(1)を音訳する契丹小字は全部「乂」を使用し、この字は契丹語の単語を綴るのにも兼用され、その音価はiである。さらに注意に値するのは、支思韻(2)と齊微韻(2)を音訳する契丹小字には本質的な相違が現れないことである。「友」は契丹語の単語を綴るのに兼用され、その音価はʧiである。それは「旨」を音訳することも「知」を音訳することもできる。「面」も契丹語の単語を綴るのに兼用され、それが「乂」と綴り合わされた音節は「友」に等しい。「朴」と「又」も同様に契丹語の単語を綴るのに兼用され、前者はʃとʧを表示し、後者はʃを表示する。ここから推測されることとして、これら契丹小字の訳音を用いた漢字は、その韻母がみな巻舌音ɻに発展していない。契丹大字も同様の事実を説明し、「尒」、「芝」、「之」、「夭」はみな契丹語の単語を綴るのに兼用され、それらの音価は明らかに契丹語固有のʃi、ʧi、ʃiである。契丹小字「兀」は支思韻の「史事使侍師」と齊微韻の「石詩」などの字を音訳するだけに用いられ、それは

契丹語の単語には出現しない。契丹大字「杲」もこれらの漢字を音訳するのに専用され、両者が代表するのはみな契丹語にない音節であるに違いない。注意すべきは、契丹小字が「史」、「師」を音訳するのに二種類の書き方:「兀」と「又乂」が出現することで、「事使侍」を音訳するときにも二種類の書き方:「兀」と「兀谷」が出現する。「又乂」が表示する音節は契丹語のʃiで、「谷」が表示する韻母は漢語の舌尖母音である。契丹大字には支思韻の「史事使侍師」と齊微韻の「石実詩」などの字を音訳する時にも二種類の音訳形式が出現し、一は漢語を音訳するのに専用される「杲」で、一は契丹語を綴るのにも兼用される「夭」であり、「夭」は齊微韻の「石実」の二字だけに出現する。「夭」の音価は契丹小字「又乂」*ʃiに相当するが、「又乂」は支思韻の「史師」の二字だけに出現する。この種の訳音上の不統一の現象は契丹人がこの種類の漢語音節を音訳する時の方針が一定しなかったことを示すが、その原因は二つある可能性が大きい。1. この種類の音節は契丹語にないため、音訳の時に「近似の代替」が出現して訳音結果の不統一をもたらさざるを得なかった。2. この種類の音節はある種の推移の過程にあり、その中の一部分の音節の音韻には率先して変化が発生したため、音訳形式の多様性が出現した。

見受けられることとしては、契丹大字は「冈」、「子」(二字同音)を用いて支思韻(1)を音訳し、「夭」と和「杲」を用いて齊微韻(2)を音訳し、清一色の「杲」を用いて支思韻(2)を音訳する。これと比べて、契丹小字の音訳はさらに精密で、「又乂」、「兀」、「兀谷」が代表するのは明らかに音価の異なる三種の音節で、加えて「兀谷」は支思韻(2)に集中的に出現し、その出現は、母音がすでに変化を発生し始めたことを示している。「夭」、「又乂」が表示する音節は、それらなおʃiの段階に止まっている音韻形式を代表している可能性があり、「杲」、「兀」は専門に漢語を音訳するために製造された表音字で、それらがそれぞれ「夭」*ʃi、「又乂」*ʃiと混用される例字を根拠に、それらの音価がʂiであることが推断される。「兀谷」が代表する音節は[ʂ+舌尖音]で、巻舌声母の後に出現する舌尖音は必ずやɻである。ここからわかるが、「谷」の支思韻(1)における音価は舌尖前音ɿに相当し、支思韻(2)における音価は舌尖後音ɻに相当する。この二個の音はともに契丹語にないもので、このため同一の文字の形式「谷」を用いて表示されるのである。

以上述べたところを総括すると、以下の推論を得る。巻舌声母は最も早く摩擦音の場合に出現し、舌尖後音ɻが率先して支思韻(2)の巻舌声母音節に発生する。齊微韻(2)はʂi＞ʂɻの推移において支思韻(2)より遅く、契丹文字が記録する漢語においてなおʂɻのような音節を出すまで発展しておらず、なおʂiの段階に止まっている。従って、遼代北方漢語のɪ韻母の音位変体及びその分布情況はこのような宋、元の音韻と異なった局面を呈しているのである。

支思韻(1)　ʦɿ、ʦʼɿ、sɿ
齊微韻(1)　ʦi、ʦʼi、si
支思韻(2)　ʧi、ʧʼi、ʂi＞ʂɻ
齊微韻(2)　ʧi、ʧʼi、ʃi＞ʂi

1.3. 入声韻尾-p

漢語学家馮蒸先生は『論〈四声等子〉和〈切韻指掌圖〉的韻母系統』及其構擬』の第三節〈入声有-p、-t、-k韻尾說:論〈等子〉和〈指掌圖〉的入声韻尾〉において、現代漢語各方言の入声韻尾の存失情況を論拠に、「もし-p尾があれば、必ず-t、-k尾あるいは-t、-ʔ尾あるいは-k、-ʔ尾があり、もし二個の韻尾ならば、必ず-p尾がない。」という、漢語入声韻尾の構造類型学法則を提起している。この法則の提起は入声韻尾-pが三個の入声韻尾において最も先に消失することを実証し、ここから『四声等子』と『切韻指掌圖』が反映する宋代漢語の入声字が依然隋唐中古音と同様に、完全な-p、-t、-kの三個の韻尾を保持していたことを論証することを意図するものである。

筆者は数年前契丹小字墓誌の音訳漢語語彙を資料として、当時の遼代北方漢語の入声字にすでに

-t、-kの二個の韻尾が存在しなかったという結論を提出した。-p韻尾の情況については、例字が僅か一個(人名「十神奴」の「十」)であるためなおその存失の真相を掲示しがたかった。近年出土した契丹大字と契丹小字の墓誌には、一群の入声-p韻尾をもつ漢語の単語がすでに釈読されている。これら新資料の出現で、遼代北方漢語に確実に一個の-p韻尾が存在することを肯定することができるようになった。ここにこれらの例字を表に列すると以下の如くである。

『広韻』推定音	契丹大字	契丹小字
業(疑業開三入咸)*ŋɪəp	光兎舍*ŋieb	
十(禪緝開三入深)*ʑɪəp	夹*ʃib	又奂*ʃib
		又冄*ʃib
立(來緝開三入深)*lɪəp		屮奂*lib
臘(來盍開一入咸)*lɑp		屮为*lab 生
	尚舍*dəb	
	牙舍*giab	

契丹大字「舍」は音節baを表示するのに用い、また漢語の入声韻尾-pを表示しうる。契丹小字「奂」は音節biを表示するのに用い、漢語の入声韻尾-pをも表示しうる。契丹小字「冄」は主に語頭子音あるいは音節を表示するのに用い、「十」の入声韻尾-pを表示するのは「又冄」の一個の孤例があるだけである。契丹小字「生」の表意字としての音価は*abuで、「臘」の入声韻尾を表示し、母音調和の接続原則に基づくものである。契丹大字「尚舍牙舍」は官職名の音訳で、この官職名は二個の入声韻尾-pをもつ漢字で構成されている。

契丹文字が記録する漢語の発音は、各地方音を含有するはずである。もし「十」字の発音に、入声韻尾-pをもつ「又奂」*ʃibと「又冄」*ʃibが出現すれば、入声韻尾をもたない「又犬」*ʃiも出現する。しかし「又犬」*ʃiと作るわずか一例は、入声韻尾-pが当時依然比較的安定した状態にあったことを示している。

1.4. 入声韻尾-t>-r

入声韻尾-tは契丹文字が反映する遼代漢語ではすでに消失しているが、ただ二個の漢字の訳音において流音の形式で出現する。一は「密」字であり、-rの形式で現れる。契丹小字「刃」*irの字源は漢字「刃」で、契丹語の「刃」は*irと発音し、故にその漢字を借用したものとなる。これはいわゆる「意転音」の借字法である。漢語の「樞密」を、契丹小字は「又灾 又刃」とも作り「又灾 又犬」とも作る。「又刃」が表示する音節は*mirで、「又犬」が表示する音節は*miである。しかし「又犬」と作るのは一個の孤例だけであり、この種の現象は上述の「十」が偶然「又犬」*ʃiと作られたのと同様に、当時の主流の発音を代表できない。契丹大字「樞密」の「密」は一律に「太」の訳音に用い、その字は契丹小字の「又刃」*mirに対応し、官職名*mirɕiの如きは、契丹大字は「太 走」に作り、契丹小字は「又刃」に作る。二は「筆」字であり、-lの形式で表現される。契丹小字は「屮冇」*bilに作る。

敦煌石室で発見された漢藏対音資料及び同時代、同地域の高昌語、維吾爾語、粟特語の対音資料には、入声韻尾-tを-rと作る特徴が出現する。羅常培は中古西北方言の入声韻尾-dの消失が-d>-ð>-r>0という発展過程に従うとするが、契丹文字の反映する現象の示すところでは、入声韻尾-tは「密」、「筆」の二個の特定の場合だけに-r/-lの形式で殘存し、その他の場合にはみなすでに消失している。以下は臻攝と山攝入声字の契丹小字における訳音である。

又及*ʃo/率(山質合三入臻)*ʃɪwĕt
又太*ʃoi/帥(山質合三入臻)*ʃɪwĕt
又犬*ʃi/室(書質開三入臻)*ɕɪĕt
歹犬*si/漆七(清質開三入臻)*ʦ'ɪĕt
仐犬*si、伞犬*ʤi/漆(清質開三入臻)*ʦ'ɪĕt
仆*pu/佛(並物合三入臻)*bɪwət
奂*xua～*xo/滑(匣黠合二入山)*ɤwæt
犮爻*juə/越(云月合三入山)*jɪwɐt
伞交*siə/節(精屑開四入山)*ʦiet
吊*ʃa/察(初黠開二入山)*ʧ'æt

1.5. 梗曾二攝の合併

ともに宋代の音系に属する北宋邵雍の『声音圖』と南宋朱熹の反切において、梗曾二攝の分合情況は異なった現象を明示している。前者では梗曾二攝が合併し、後者では梗曾二攝が分立しているのである。契丹文字が反映する遼代北方漢語では、梗曾二攝には区別がなく、ともに同様の綴り方形式で表示される。

尚及*liŋ/陵(曾攝)*lɪəŋ、令(梗攝)*lɪɛŋ
屮同*liŋ/陵(曾攝)*lɪəŋ、令(梗攝)*lɪɛŋ、領(梗攝)*lɪɛŋ
乂同*xiŋ/興(曾攝)*xɪəŋ、京(梗攝)*kɪɐŋ、慶(梗攝)*k'ɪɐŋ、輕(梗攝)*k'ɪɛŋ
又爻*ʃiŋ/丞(曾攝)*ʑɪəŋ、聖(梗攝)*ɕɪɛŋ
朴爻*ʃiŋ/承丞(曾攝)*ʑɪəŋ、郕(梗攝)*ʑɪɛŋ

1.6. 歌戈韻合口の分化

中古の歌韻は果攝開口一等に属し、一般にɑと推定される。契丹小字に出現する四個の表音は截然と異なった綴り方形式である。「戈棵科課禾和」などの字は、音韻変化法則によればその韻母はuoであるはずで、現代洛陽話は依然この発音だが、北京話ではəと発音する。契丹小字はこれらの字に遼代北方漢語においてすでに異なった発展が出現していたことを反映している。

九爻*gə/哥(見歌開一平果)*kɑ
奂*xo/和(匣戈合一平果)*vuɑ
圢*ul/娥(疑歌開一平果)*ŋɑ
叔*qa/可(溪哿開一上果*k'ɑ

1.7. 唇音声母の宕攝と通攝の同音

业当*poŋ/防(並陽合三平宕)*bɪwaŋ、訪(滂漾合三去宕)*p'ɪwaŋ、雱(滂唐開一平宕)*p'ɑŋ
奉(並腫合三上通)*bɪwoŋ、馮(並東合三平通)*bɪuŋ、鋒(滂鐘合三平通)*p'ɪwoŋ

2 遼代北方漢語の声母

2.1. 正歯音声母

『中原音韻』と『蒙古字韻』が反映する元代漢語の情況では、中古時期の莊組声母と章組声母は

すでに合流し、舌上音知徹澄の三個の声母の発音も正歯音声母と合一していた。『蒙古字韻』の八思巴対音は、同じ符号を用いて照系声母と知系声母を表示するが、小韻の歸類において、知二、荘が一組となり、知三、章が一組となる分立状態を示している。この現象に関して、比較的説得力のある解釈は、これらの字が分立したのは、声母が異なったからではなく韻母が異なったためとするものである。つまり前者はi介音をもたず、後者はi介音をもつ。支思韻の韻母がみなɪに変わり、介音はなく、ゆえに荘組と章組も区別がなくなったのである。北宋·邵雍『皇極經世·声音倡和圖』が荘組の字と章組の字をともに一類に帰するのは、兩組の声母合流の転変が宋代にすでに発生し、元代照系声母の音韻の構成が宋代を継承して継続発展した結果であったことを示している。。

以下では漢語音韻研究の結果を対照系とし、契丹文字を通じて遼代北方漢語の正歯音声母音価の実情を考察する。

2.1.1舌上音と正歯音の合流

まず契丹大字が提供する例証を見よう。

乏*ʧi／知(知母)*ʈɪə、置(知母)*ʈɪə、[字源]漢字「之」(知母)*ʈɪə
旨(照母)*ʨi

乏反*ʧiŋ／鄭(澄母)*ɗɪɛŋ
政(照母)*ʨɪɛŋ、承(禪母)*ʑɪəŋ

反*ʧiu／柱(澄母)*ɗɪu
諸(照母)*ʨɪo

夭*ʃi／食(神母)*ʧɪək、実(神母)*ʧɪĕt、石(禪母)*ʑɪɛk

昬*ʂi／事(床母)*ʧɪə
使(山母)*ʃɪə、史(山母)*ʃɪə、師(山母)*ʃi、侍(禪母)*ʑɪə、[字源]漢字「是」(禪母)*ʑɪe

その次に契丹小字が提供する例証を見よう。

朩*ʧ、ʧ／涿(知母)*ʈɔk、豬(知母)*ʈɪo、転(知母)*ʈɪwɛn、陳(澄母)*ɗɪĕn、持(澄母)*ɗɪə
楚(初母)*ʧ'ɪo、冊(初母)*ʧ'æk、州(照母)*ʨɪəu、昭(照母)*ʨɪɛu、諸(照母)*ʨɪo、主(照母)*ʨɪu、章(照母)*ʨɪaŋ、春(穿母)*ʨ'ɪuĕn、川(穿母)*ʨ'ɪwɛn
城(禪母)*ʑɪɛŋ、郯(禪母)*ʑɪɛŋ、臣(禪母)*ʑɪĕn、承丞(禪母)*ʑɪəŋ、常(禪母)*ʑɪaŋ、尚(禪母)*ʑɪaŋ

劝*ʧu／楚(初母)*ʧ'ɪo、充(穿母)*ʨ'ɪuŋ

友*ʧi／鎮(知母)*ʈɪĕn、鄭(澄母)*ɗɪɛŋ
旨(照母)*ʨi、政正(照母)*ʨɪɛŋ

攴*ʧi／趙(澄母)*ɗɪɛu
諸(照母)*ʨɪo、主(照母)*ʨɪu、詔昭(照母)*ʨɪɛu

吊*ʧa／長(澄母)*ɗɪaŋ
牖(床母)*ʧɐp、察(初母)*ʧ'æt、敞(穿母)*ʨ'ɪaŋ、昌(穿母)*ʨ'ɪaŋ、尚(禪母)*ʑɪaŋ、常(禪母)*ʑɪaŋ

又*ʃ／樞(穿母)*ʨ'ɪu、瀋(穿母)*ʨ'ɪĕm、順(神母)*ʧɪuĕn、神(神母)*ʧɪĕn
率(山母)*ʃɪwĕt、省(山母)*ʃɐŋ、帥(山母)*ʃɪwĕt、師(山母)*ʃi、使史(山母)*ʃɪə、山(山母)*ʃæn、少(書母)*ɕɪɛu、舜(書母)*ɕɪuĕn、聖(書母)*ɕɪɛŋ、書(書母)*ɕɪo、申(書母)*ɕɪĕn、水(書母)、水*ɕwi、室(書母)*ɕɪĕt、叔(書母)*ɕɪuk、守(書母)*ɕɪəu、尚(禪母)*ʑɪaŋ、上(禪母)*ʑɪaŋ、淑(禪母)*ʑɪuk、壽(禪母)*ʑɪəu、署(禪母)*ʑɪo、十(禪母)*ʑɪəp、蜀(禪母)*ʑɪwok、善(禪母)*ʑɪɛn

兀*ʂi／事(床母)*ʧɪə、士(床母)*ʧɪə

使史(山母)*ʃɪə、師(山母)*ʃi、侍(禪母)*ʑɪə、氏(禪母)*ʑɪe、石(禪母)*ʑɪɛk、詩(書母)*ɕɪə

唐五代の西北方音では、知組と照三はすでに合併している。羅常培の意見によれば、照二と照三もすでに区別がなくなっていた。邵雍『声音圖』を代表とする宋代汴洛方言における知照兩母の分合問題には、二種類の相反する見解がある。陸志韋は、『声音圖』の荘母はtʂ、章母はʨで、知組と照組は必ずしも合併しておらず、音価が接近していただけだとする。契丹語には舌面破擦音と舌尖破擦音が存在せず、舌葉音があるだけである。従って、以上に列挙した同音の字例は、みな契丹語固有のʧ、ʃ、ʃを漢語の近い部位の声母に対音したものである。王力の推定音によると、舌上音と正歯音は宋代にはすでに一群の舌面音に合併していた。従って、契丹語のʧ、ʃ、ʃと対音する漢語声母には、二種類の可能性がある。清一色の舌面音声母か、その間なお差異の存在した二群の声母かである。

2.1.2正歯音内部の分合

以上の対音例字において、契丹小字の「兀」と契丹大字の「昬」だけが漢語の音訳に専用され、それらは契丹語の単語には出現しない。ここから、それらが代表するのが、契丹語にない音価であったことがわかる。前文に証明したように、舌尖母音ʅとɿは契丹小字「谷」によって表示され、「兀」は単独で使用される時にはʂiの音節を代表し、「谷」と結合する時にはʂの子音だけを代表する。宋代の照系声母は一般に舌面音ʨ、ʨ'、ɕに推定されるが、摩擦音声母字「使史師」は契丹小字「兀」を用いて対音され、また「又犬」を用いて対音されるが、「侍氏詩事士石」は「兀」だけを用いて対音される。これは遼代北方漢語が照系声母の一部の字においてすでにɕ>ʂの転化の出現を開始しており、最も先に巻舌音を育成する温床となったのが正に摩擦音声母であったことを示している。「使史師」がおそらくなおこの種の転化の発展過程にあったことは、契丹小字の対音用字上、「兀」と「又犬」が混用されていることに現れ、一方、「侍氏詩事士石」はおそらくすでにこの種の転化を完成していたので、契丹小字は一律に「兀」を使用してその声母を表現しているのである。

中古のいくつかの禪母平声字は穿母に転入し、仄声字は審母に転入する。契丹小字はこの音韻変化がすでに遼代北方漢語に存在していたことを反映し、平声字声母は一律に「朩」*ʧ(あるいは「吊」*ʧa)を用いて対音し、「城郯臣承丞常」の如くであり、仄声字声母は一律に「又」*ʃを用いて対音し、「上淑壽署十蜀善」の如くであった。そのうち禪母の「尚」字だけに当時二つの発音があり、契丹小字の「尚」は「朩気」*ʧaŋ、「吊気」*ʧaŋとも作り、「又気」*ʃaŋとも作り、これは「尚」の声母が正に破擦音から摩擦音へ転化する発展過程にあったことを示している。「尚」の発音が二つある現象は、中古のいくつかの禪母仄声字も先に穿母に転入し、のちにはじめて審母に推移したことを示している。この転化過程は遼代北方漢語ではすでに終末に近づき、そのため「尚」以外の禪母仄声字はすでに「又」*ʃを用いて声母を表示するようになった。契丹大字も類似の事実を反映し、漢字「尚」を借用して「尚」*ʧaŋを製作し、穿母字「敞」・禪母字「常」を音訳するのに専用するのは、当時この三個の字の声韻が同じであったことを示している。

中古の床母字の一部分は照母、穿母に併合され、一部は審母に併合された。契丹小字が「兀」を用いて床母三等字「事士」を対音し、それらの声母がすでに摩擦音に変わっているのは、この音韻推移が遼代北方漢語にすでに出現していたことを示している。

穿母三等字「樞瀋」の声母を契丹小字がみな「又」を用いて対音するのは、当時それらの声母が審母とすでに完全に一致していたことを示している。

中古の初母字の一部は穿母に併合され、一部は清母に併合されていた。契丹小字が「朩」*ʧを用いて「冊」の声母を対音するのは、「冊」の声母の現在の発音は舌尖破擦音であり、清母に併合された字も穿母から転化したことがわかる。金代女真碑文において依然ʧを用いて「冊」の声母に対

音することは、その字の清母への発展が金代以後ようやく完成したことを説明している。

2.2. 齒頭音声母

契丹小字	精母字	清母字	從母字	心母字	邪母字	莊母字
伞*ʂ	子紫濟祭進晉宗節姐將	漆左	靜		隋	祖
仐*s	子進將宗酒	漆左刺采千清青	齊秦錢前曹從	西宋仙宣小相修三	隋頌謝	祖
廿*ʂɪ̈, tsɪ̈, sɪ̈	子	刺		司		
万*s		漆刺七蔡	齊			
屮*so			蕆			
契丹大字	精母字	清母字	從母字	心母字	邪母字	
犀*si		漆	齊	西	隰	
宂*si			秦靜			
冈*ʂɪ̈, tsɪ̈, sɪ̈	紫	刺	慈	司四		
子*ʂɪ̈	子紫					
平*so	宗				松	
序*sin	晉			信		
将*siaŋ	將			相		

漢語の精母、清母は契丹語になく、このため契丹大字はs子音を開頭とする音節の字を使用してこれらの字の声母に権宜対音している。上表から看取されるように、「犀宂平序将」などの字はみな同時に「精母／非精母」あるいは「清母／非清母」兩類の声母の字の対音に用いられ、「犀」の字源は心母字「犀」で、「宂平序」の三字は契丹語の単語を綴るのに兼用され、従ってそれらの子音は疑いなくみなsとなる。精母、清母と舌尖母音の結合した音節に逢着して、契丹大字は専門に「冈」を製作して対音した。契丹小字は表音の精確性において契丹大字より大いに進歩しているが、依然いくつかの音節字を留めており、たとえば「廿」は契丹大字「冈」が代表する音価と同様に、ʂ、ts、sの三個の声母を包括する音節字である。「仐」の使用範囲は最も広く、歯頭音の全部の声母を包括している。その音価は契丹語固有のsであり、sを用いて漢語の精、清二母を対音することは、本来アルタイ語系各族の伝統である。契丹小字は一個の専門に精母に対音する「伞」を製作したが、実際の使用においてはなお「仐」と混交している。この種の現象は、後世の蒙古文や滿洲文にも依然時に見ることができる。従って、上表に出現したこれら対音字の混用は、遼代北方漢語の実情をありのままに反映したものではありえない。

中古の從母が精母と清母に合併される音韻変化の現象は、契丹文字に反映され、精母に合併される「靜」は正に「伞」を用いて対音され、清母に合併される「齊秦錢前曹從」は正に「仐」を用いて対音されるが、「蕆」の対音字「屮」は契丹語の単語にも出現し、従ってそれが含む子音はsでしかありえない。比較すると、契丹大字の表音はさほど精密でなく、「靜」と「秦」の声母はみな同一の「宂」を用いて対音し、「宂」が代表する音価は契丹語固有のsiである。

中古の邪母は心母に併合され、上表の「隋頌謝隰松」は均しくs子音を含む契丹字を用いて対音される。ただ「隋」字の一例に契丹小字が「伞」を用いて対音することが出現し、『耶律智先墓誌銘』に見えるが、同墓誌は今一つの箇所では「仐」を用いて対音しており、前者の写法が誤りであ

ることがわかる。

中古の莊母の一部は精母に合併され、契丹文字には一個の「祖」字のみが出現し、「伞」と「仐」を用いて対音する。清母に合併される中古初母字は契丹小字では「冊」が出現するだけで、上述の如く、契丹小字は「朩」*ʃを用いて「冊」の声母を対音し、その字が遼代になお穿母に属し、清母に転化したのが金代以後のことであることがわかる。

参考書目

羅常培1933.『唐五代西北方音』、『史語所集刊』甲種之十二。

金光平、曾毅公1957.『錦西西孤山契丹文墓誌試釈』、『考古学報』1957年第2期。

金光平1962.『從契丹大小字到女真大小字』、『内蒙古大学学報』、第1期。

紹榮芬1963.『敦煌俗文学中的別字異文和唐五代西北方音』、『中國語文』、第3期。

金光平、金啓孮1964.『女真語言文字研究』、内蒙古大学出版社、1980. 文物出版社。

周祖謨1966.『問学集』、中華書局。

金啓孮1984.『女真文辞典』、文物出版社。

王力1985.『漢語語音史』、中國社會科学出版社。

唐作藩1987.『音韻学教程』、北京大学出版社。

高田時雄1988.『敦煌資料による中国語史の研究』創文社。

陸志韋1988.『陸志韋近代漢語音韻論集』、商務印書館。

金永田1991.『契丹大字「耶律習涅墓誌」考釈』、『考古』、1991年第4期。

李新魁1994.『李新魁語言学論集』、中華書局。

蔣紹愚1994.『近代漢語研究概況』、北京大学出版社。

馮蒸『論〈四声等子〉和〈切韻指掌圖〉的韻母系統』及其構擬』、『漢字漢語学術研討會論文集』吉林教育出版社。

金光平、金啓孮、吉本道雅、烏拉熙春2002.『愛新覺羅氏三代阿爾泰学論集』明善堂。

愛新覺羅烏拉熙春1999.『契丹大小字と女真大小字――金光平先生生誕百周年を記念して』、『立命館文学』560号

2002.『女真語言文字新研究』、明善堂。

2004.『契丹言語文字研究』、東亜歴史文化研究会。

2004.『遼金史と契丹・女真文』、東亜歴史文化研究会。

2004.『契丹文字と女真文字の歴史的比較研究』文部科学省科研補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書